

かけはし

静岡大学 教職大学院

NEWS LETTER

No.10

2019年3月2日



静岡大学教育学研究科・教職大学院 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836

教職大学院第9期生 成果報告書テーマ・大学院2年間の学びを振り返って

静岡大学教職大学院 第9期生



平成31年2月

【学校組織開発領域】

池田哲朗（静岡県立金谷高等学校）

総合学科高校における生徒のキャリア形成過程に関する研究—学校の歩みと生徒・教員・卒業生の省察に着目して—

教職大学院での研究活動は、私にとって壮大な探究活動でした。その時間は非常に苦しく、悩みの連続でしたが、最終的には楽しく感じられるようになっていきました。探究するとはこういうことなのだと、我が身をもって知ることができたように思います。

加藤達也（静岡市立駒形小学校）

小中一貫教育コーディネーターを活用した施設分離型小中一貫教育の円滑な推進方法の検討

大学院の授業、多数の視察、そして研究…現状を可能な限り俯瞰・省察し、よりよい教育に変えていく主体は学校現場だということを改めて実感しました。子どもが幸せになるための公教育を追究・実践できればと思います。

小林佐知子（静岡県立富士宮東高等学校）

総合的な探究の時間を軸としたカリキュラム・マネジメント—主権者教育の充実を図るカリキュラム開発の推進—

知識と知識、人與人、今までの自分とこれからの自分が、繋がる2年間でした。「くるたのしい」過程を経て、学びが深まっていくという感覚を忘れずに、邁進していきたいと思います。貴重な経験をさせていただき、心より感謝申し上げます。

坂本理華子（静岡市立城内中学校）

児童・生徒の思いに寄り添った学校づくりに取り組む教員集団に関する研究—A型小中一貫教育を通して—

私の教員人生はセレンディピティの連続だと言えます。この2年間も素敵な出会いを多く経験でき、幸運な時間でした。大学での学びは常に理論と実践の往還。自分のこれまでの実践を価値づけられ、硬くなった私の心もいつの間にかしなやかさを取り戻せました。

佐々木浩彦（下田市立下田中学校）

人口減少下における新中学校開校準備に関する研究—下田市の中学校再編を事例として—

教職大学院の2年間では、新たな視点や思考、研究者や仲間との対話、実習での経験を通し、理論と実践を往還させた主体的な学びの機会を得ました。今後は、俯瞰力、多様性を取り込む視点を意識し、学び続ける教師として日々の実践に取り組みたいと思います。



学校組織開発領域



増田有正（菊川市立加茂小学校）

汎用的な資質・能力を育成する総合的な学習の時間を軸としたカリキュラム・マネジメントー資質・能力を発揮する場面の設定を手立てとしてー

教育を俯瞰することができるようになったことが、大学院でのいちばんの成長です。実践研究では、カリキュラム・マネジメントの面白さも難しさも実感しました。修了後も学び続け、教育実践を通して地域の児童・生徒や先生方の役に立ちたいです。

松原祐記子（浜松市立曳馬小学校）

教員が学び続けるプロセスと環境に関する研究ー教員育成指標策定までの背景に着目してー

未来に向けた教育だけでなく、今までの教育の歴史や議論の変遷を見直すことの重要性を感じた2年間でした。その中で不易と流行を見極め、これからの教育の在り方を考えていく視点を学びました。貴重な学びの機会を頂けたことに感謝します。

山本佳奈（磐田市立豊田中学校）

「チームとしての学校」が機能するためのシステム構築ー専門スタッフ人材との連携・協働を目指してー

大学院の授業や実習、研究会等を通して、様々な方と出会い、新たな知識を得ることができました。また、教育そして自身について見つめ直し、改めて人との繋がりの大切さを実感する時間ともなりました。この学びの機会をいただけたことに、心から感謝いたします。

【教育方法開発領域】



岩倉史佳（学部卒大学院生）

図画工作科における表現力育成を意識した単元開発・実践とその評価ー興味・関心を引き出す導入の工夫を通してー

大学院の講義で専門的な知識を得たり、現職の先生方から様々な経験をお聞きしたりして多くのことを学びました。また、実習校での経験を通して、教員としてのイメージをもつことができました。4月からも学び続ける姿勢を大切に、教員として成長していきたいです。

高橋裕貴（学部卒大学院生）

理科を学ぶ意義の実感を目指した授業の効果ー中学校、高等学校での授業実践を通してー

理学部時代に「教えること」について自分の力不足を感じ、大学院への進学を決意しました。大学院での学びや授業、そして研究の中で「子どもがいかにか学ぶか」と「その環境をどうつくり出すか」について考えるようになり、今後教員として生きていく上で大切なことを学べたと思います。

田代啓太（学部卒大学院生）

教職大学院実習における授業実践と省察との往還による授業力向上に関する研究ー小学校算数科の単元開発とその評価を通してー

大学院の2年間で多くの理論を学び、多くの実践をすることができました。また、現職の先生方と日々を過ごす中で多くのことを学び、自分の教育観が大幅に変わりました。4月から、ここでの学びを生かし、教員として頑張っていきます。

寺沢得幸（島田市立島田第二中学校）

実生活と関連付けた中学校理科の単元開発ーオープンエンドのパフォーマンス課題と議論を組み合わせた効果の検討ー

大学院での2年間は、教員として歩んで来た道を振り返るとともに、新たな目標を得た貴重な時間でした。1教科の学びにとどまらず子どもの学びを包括的に捉えることや、物事を俯瞰してみるものの大切さに気付くことができました。今後も学び続ける教師でありたいと思います。

山路崇仁（御殿場市立富士岡小学校）

小学校社会科歴史分野における時代の構造的理解を促進する単元開発とその評価ー歴史的思考力の育成に焦点をあててー

教職大学院での2年間は、これまでの実践を振り返り、最先端の理論や幅広い知識を学ぶ機会としてとても有意義でした。先生方だけでなく、院生の皆さんからも多くを学びました。ここで得た2年間の学びを活かし、成長し続ける教師を目指していきたいです。

【生徒指導支援領域】



海老岡秀斗 (学部卒大学院生)

学校生活に困り感を抱える中学生の見立てと支援のプロセス

以前は「教育」という際限のない営みに携わることによって不安を感じていました。しかし、教職大学院での様々な学びは私に確かな自信を感じさせてくれるほど有意義なものでありました。この2年に誇りと感謝をもって、これから一層邁進して参ります。

大井健都 (学部卒大学院生)

学校に困り感を持つ中学校生徒への支援策の検討—ユニバーサルデザインの視点から—

大学院での2年間は、教授や現職教員、実習校の教員、生徒と多くの人との出会いがあり、教育に関する学びに加え、私自身の人間力についても鍛えることができたと考えています。大学院での学びを財産として、来年度からの教員生活に活かしていきたいと思えます。

田窪祐実 (学部卒大学院生)

音楽科授業の導入時間を用いたグループ・アプローチの効果—学級適応感と授業への参加姿勢を視点として—

学部時代との大きな違いは、「様々な特徴をもった子どもたちと現場でどう関わるか」と2年間テーマをもち続けられたことです。その上で、授業と実習に臨むことができました。学ぶ機会をいただいたこと、学び方を学べたことに感謝し、教員として精進を重ねます。

田中大基 (学部卒大学院生)

特別支援学級在籍児童に対する支援過程—支援者との関係性の変容に焦点を当てて—

教員を目指して教職大学院へ進学しましたが、大学院生活で自分と向き合い、領域変更や進路変更といった、今後の人生を左右する大きな決断をしました。2年間で得た子どもを支援する知識や子どもと関わってきた経験を、新たな活動の場で活かしていきたいです。

堂前拓耶 (浜松市立三ヶ日中学校)

若手教員の生徒指導の視点を踏まえた学級経営観の変容—ショートエクササイズとメンタリングの継続的実践の効果—

2年間の学びを通して、これまでの自身の取組を振り返るとともに、新たな知識や視点を獲得することができました。当たり前を当たり前と思わず、様々な可能性を考えていける広い視野をもって、これからの教育活動を行っていききたいと思えます。

湯山理沙 (学部卒大学院生)

学校生活に不安を感じている中学生への支援—別室登校の意味—

様々な領域の授業、実習での経験、現職の先生方との日々の会話、ストマス同士の絆…全ての経験が学びでした。この2年間における沢山の出会いが最大の「成果」だと思っています。春から高校教師として、出会

いと学びを大切にして、日々精進します。

吉田研水 (牧之原市立相良小学校)

児童の学校適応感を高める支援の在り方—図工を切り口としたアプローチの検討—

普段は「研修を水に流すと書いて研水です。」と冗談で自己紹介する私ですが、教職大学院での学びは決して水に流せないものとなりました。学んだからこそ増える悩みもありますが、子ども達のために自分に何ができるのか、これからも学び続けたいと思えます。

【特別支援教育領域】



大庭孝仁 (浜松市立蛸塚中学校)

二次的援助を必要とする集団に焦点を当てたクラスワイドなプログラムの実践—社会的相互作用を促す「自分づくり」「仲間づくり」「集団づくり」—

教職大学院での2年間は、教員としてこれまで実践してきた自分を見つめ直すとともに、これからの自分、これからの教育について考える貴重な時間となりました。現場に戻り、同僚や子どもたちと共に学び続けたいと思えます。

竹下雅美 (三島市立中郷小学校)

小学校の通常の学級におけるクラスワイドな支援と個別支援を組み合わせた取り組み—授業参加状況の改善を目指して—

「特別な教育的ニーズ」は環境によって変動することを改めて学んだ2年間でした。「目の前の子どもたちの将来を考えたとき、今、自分がやるべきことは何か」。教員としての自分自身も環境の一部であることを心して、これからも問い続け、学び続けてゆきます。

山下憲市 (静岡県立富士特別支援学校)

「学習に向かうからだづくり」のためのアセスメントツールと指導プログラムの開発

大学院での学び、それは「啐啄同時」といえます。成長したい気持ちと呼び起こし、その機を逃さず導いてくれました。今後、私自身学び続けながら、子どもの学びたい気持ちを引き出し、ほどよい指導及び支援から資質・能力を育成していきます。啐啄同時を実践していきたいです。



ブックレビュー



『学級づくりの教科書』 有田和正 さくら社 2011年

この本のキーワードは、「教師の笑顔とユーモア」です。新年度に向けて、学級経営に「ユーモアと笑い」で温かい雰囲気づくりをしていきたい、そんな思いをもっている先生方におすすめの一冊です。

学級経営をする上で、筆者が大切にしてきたことを、様々な視点に分けてまとめられています。その軸になるものは、教師自身がユーモアをもつこと。ユーモアの語源はヒューマー（人間性）という説もあり、ユーモアを磨くことは人間性を磨くことであるという筆者の考えに基づいた実践が満載で、真似したくなります。 【生徒指導支援領域 M1 旭 剛】

『図とイラストですぐわかる

教師が使えるカウンセリングテクニック 80』

諸富祥彦 図書文化社 2014年

テクニックと聞くと、「何を軽々しいことを」と思われる方もいるかもしれませんが、侮るなかれ！現場の忙しい教師が、気軽に楽しく教育カウンセリングの手法を学ぶことができるのがこの一冊なのです。

しかも、テクニックを紹介するだけではなく、ロジャーズ、フォーカシング、アドラー心理学など様々なエッセンスが散りばめられており、さっそく使ってみようと思うこと間違いなしです。著者はこうも言っています。「哲学をもった教師がそのテクニックを使う時、それは命を吹き込まれたものになります」と。哲学をもった教師となる、その第一歩におすすめの一冊です。

【生徒指導支援領域 M1 阿部哲也】



発行責任者	専攻長	石上 靖芳	編集後記 今春、静岡大学教職大学院を羽ばたく23名の先輩方の「研究テーマと2年間の思い」を編集させていただきました。これまでの学びの成果が種となり、次は静岡県下の学校現場で芽吹き、花開いていくことでしょうか。今後、ますますのご活躍を祈念いたします。 今年度も「かけはし」を3回発行させていただきました。多くの方とのつながりの中でこのニュースレターが発行できたことを心より感謝いたします。 来年度で10期という節目の年を迎える静大教職大学院。これからも学びの成果を発信していきます。 【学校組織開発領域 M1 澤村 亮】
監修	担当教員	鈴木 秀志	
顧問	M2代表	松原祐記子	
編集長	M1	澤村 亮	
副編集長	M1	米田 一也	
編集員	M1	大石 尚代	
	M1	阿部 哲也	
	M1	鈴木 望圭	
	ストレートマスター	山岸 由承	
	ストレートマスター	桐田 奏	
題字：第8期生 北住 美來 落款印刻：第9期生 池田 哲朗(今年度終了生)			

